

みちのく

岡本かの子

青空文庫

桐きりの花の咲さく時分であつた。私は東北のSという城下町の表通りから二側目ふたかわめの町並まちなみを歩いてゐた。案内する人は土地の有志三四名と宿屋の番頭であつた。一行はいま私が講演した会場の寺院の山門を出て、町の名所となつてゐる大河に臨み城跡しろあとの山へ向うところである。その山は青葉に包まれて昼も杜ほととぎす鵲つぐすが鳴くという話である。

私はいつも講演のあとで覚える、もつと話し続けたいような、また一役済ましてほつとしたような——緊張きんちようの脱け切らぬ気持で人々に混つて行つた。青く凝こつて澄すんだ東北特有の初夏の空の下に町家は黝くろずんで、不揃ふそろいに並ならんでゐた。廂ひさしを長く突出つきだした低いがつしりした二階家では窓から座敷ざしきに積たままれてゐるらしい繭まゆの山の尖さきが白く硯のぞかれた。

「近在はるごで春蚕はるごのあがつたのを買集めてゐるところです」

有志の一人は説明した。どこからかそら豆ゆでを茹ゆる青い匂におがした。古風な紅白の棒の看板けんを立てた理髪店りはつてんがある。妖艶ようえんな柳やなぎが地上にとどくまで枝垂しだれてゐる。それから五六軒けん置いて錆朽さびくちた洋館作りの写真館が在る。軒のきにちよつとした装飾そうしよくをつけた陳列窓ちんれつまどが私の足を引きとめた。

緊張の気分もやつと除とれた私は、どこの土地へ行つても起るその土地の好みの服装ふくそうと

か美人とかいうのはどういふ風のものであらうかと、いつもの好奇心が湧いて来た。

窓の中の写真は、都会風を模した、土地の上流階級の夫人、髯自慢らしい老紳士、あやしい洋装をした芸妓、ぎごちない新婚夫妻の記念写真、手をつないでいる女学生

——大体、こういう地方の町の写真館で見えるものと大差はないが、切れ目のはつきりした涼しい眼つきだけは撮されている男女に共通のものがあつてこの土地の人の風貌を特色づけていた。

だが、私が異様に思ったのは、それらに囲まれて中央に貼つてある少年の大きな写真である。写真それ自体がかなり旧式のを更に年ふるしたせいもあるだろうが、それにしても少年の大ようで豊かでそして何か異様なものが写真面に表われているのに心がうたれた。

少年はいい絹ものらしい着物を無造作に着て、眼鼻立ちの揃った顔を自然に放置していた。いくら写真を撮し慣れた人でも、これくらい写真機に対して自然に撮させた顔も少ないからう。

私が思わず硝子近く寄つて、つくづく眺め入るのを見て、有志の一人は側に来て言った。「それは、東北地方では有名だった四郎馬鹿の写真です」

「白痴はくちなのですか、これが」私は訊たずね返した。

「白痴ふつうですが、普通の馬鹿とは大分變つておりまして、みんなに、とても大事にされまし
た」

そして、これも遠来の講演者に対する馳走ちそうとでも思ったように四郎馬鹿について話してくれた。

汽車の係員たちまでがこの白痴の少年には好意を寄せて無賃で乗車さす任意あつの扱あつかいが出
来たというから東北の鉄道も私設時代の明治四十年以前であらう。この町に忽然こつぜんとして
姿の見すばらしい少年が現われた。

少年は、見当り次第の商家の前に来て、その辺にある箒ほうきを持って店先を掃くのである。
その必要のある季節には綺麗きれに水を撒まくのである。そうしたあと、少年はにこにこして店
の前に立つて何かを待つ様子である。

始めは何事か判わからなかつた店の者は余計なことをすると思つて、少年の所作を途とち中ゆうで
妨さまたげたり、店先に立つ段になると叱しかつて追い放つたりした。少年は情ない顔をして逃にげ去
る。ときどきは心ない下男に打たれて泣き喚わめきながら走つたりした。

けれども少年はしばらくすると機嫌きげんを取直す。というよりも芥ごみを永く溜ためてはおけない流水のように、新鮮しんせんで晴やかな顔がすぐ後から生れ出て晴やかな顔つきになる。そしてもう別の店の前を掃くのであった。

「性質のいい乞食こじきなのだ。一飯いっばんの恵めぐみに与あずかりたいのだ」

そう受取るようになった店々のものは、掃除そうじをしたあとで立つ少年を台所の片隅かたすみに導いて食事をさせた。少年はなぜこれが早く判らなかつたのだらうという顔つきをして、嬉うれしそうに箸はしを取り上げる。

少年には卑屈ひくつの態度は少しも見えなかつた。

食事の態度は行儀ぎようぎよく慎つつましかつた。少年はたつぷり食べた。「お雑作でがんした」礼もちゃんと云つた。店の忙しいときや、面倒めんどうなときに、家のものは飯を握にぎり飯にしたり、または紙のに載せて店先から与あたえようとした。すると少年は苦痛な顔をして受取りもせず、踵きびすを返してすぐと他の店先へ掃きに行つた。坐すわつて膳ぜんに向うのでなければ少年は食事と思わなかつた。

少年は錢も受取らなかつた。錢は貰もらつたこともあるが大抵たいがい忘れて紛失ふんしつするので懲こたらしい。

「あれは、どこか素性すじょうのいい家に生れた白痴なのだ」

「そう言えば、上品だ」

町の人は、少年自身がわずかに記憶きおくしている四郎という名を聞き取って四郎馬鹿と言ったが、四郎馬鹿さんと愛称をもつて呼ぶようになった。

「四郎馬鹿さんに見舞みまわれた店はどうも繁昌はんじょうするようだ」

東北の町々にこういう風評が立った。だいぶ以前から四郎は、最初出現したS——の城下町にも飽あいて、五六里距へだたった新興の市へ遊びに行った。誰だれか物好きに荷馬車にでも乗せて連れて行つたらしい。それから少年は町から町へ漂ひようはく泊はくすることを覚えた。汽車にも乗せた人があるらしい。奥羽おうう、北国の町にも彼の放浪ほうろうの範圍はんいは拡張された。それらの町々でも少年の所作に变りはなかった。店先の掃除そうじをして一飯の雑作に有りついた。誤解や面倒がる関門を乗り越こして四郎の明澄性めいちようせいはそれらの町々の人の心をも捉とらえた。

「四郎馬鹿さんに見舞われた店は、どうも繁昌するようだ」

それには多分に迷信性と流行性があつたかも知れない。しかし少年の一点の僻ひがみも屈くつた託たくもない顔つきと行雲流水のような行動とは人々の心に何か気分を転換てんかんさせ、生活に

張気を起させる容易なものがあつたらしい。マスコットというものはそうしたものである。

町々の人は少年を歓迎し始めた。少年の姿を見ると目出度いと言って急いで羽織袴で恭しく出迎えるような商家の主人もあつた。華々しい行列で停車場へ送つたりした。

少年の姿は絹物の美々しいものになった。町の有力者は言った。

「あの白痴を呼んで来るのは町の景氣引立策にもいいですなあ」

北国寄りのF——町の表通りに、さまで大きくはないがしつかりした呉服店の老舗があつた。お蘭という娘があつた。四郎はこの娘が好きでF——町へ来ると、きつとこの呉服店へ立寄つた。四郎はお蘭の傍にただで満足した。お蘭の針仕事をしている傍に膝をゆるめて坐つて、あどけないことを訊ねたり単純な遊びごとをしたりした。小春日和の暖かい日にはうとうと居眠りをした。ときに眼を覚まして、そこにお蘭のいるのを確めると、また安心して瞼をゆるめた。

お蘭は、世の中の雑音には極めて怖え易く唯一人、自分だけ静な安らかな瞳を見せる野禽のような四郎をいじらしく思った。彼女はこの人並でないものに何かと労りの心を配つてやつた。それは母か姉のような氣持だった。こうしているうちに一つの懸念がお蘭の

心に浮^うんだ。あるとき彼女は四郎にこう訊^きいた。

「もし、あたしがお嫁^{よめ}に行くとき、四郎さんはどうする」

四郎は躊躇^{ちゅうちよ}なく答えた。

「おらも行くだ、一緒^{いっしょ}に」

お蘭は転げるように笑った。

「そんなこと出来ないわ。人を連れて嫁に行くなんて」

四郎には判らなかつた。

「どうしてだ」

「お嫁に行くということは私が向うの人のものになってしまうのだから、その人が承知してくれないじゃ、一緒に行けないのよ」

「お蘭さんが誰かのものになるというだかね」

「そうよ」

「ふーむ」

白痴の心にもお蘭が自分から失われ、自分は全く孤立無援^{こりつむえん}で世の中に立つ侘^{わび}しさがひしひしと感^{かん}じられた。現われて来る眼に見えぬ敵を想像して周章^{あわ}てはてた。

「お蘭さ、嫁に行っちゃいけねえ」

「そんなこと無理よ」

四郎は悲しい顔をして考え込んでいたが、もつともらしい大人の真似をして膝を打った。

「それええだ、おらお蘭さ嫁に貰うべえ」

お蘭は呆れた。けれどもこう答えた。

「四郎さが私をお嫁に貰ってくれるの。こりや偉いわねえ」

「おら貰うべえ」四郎は得意な顔つきをした。

「けれども四郎さ。あんたが私をお嫁に貰うには、もつと立派な賢い人にならないじゃ—

—ねえ、判って」

お蘭に取って、この言葉は一時凌ぎの気休めであり、また四郎への励ましに使ったものに過ぎないけれども、四郎は永く忘れなかった。彼の心は七八つの幼ないものだが年齢はもう十六七の青年に達していた。

夏はさ中にも近づいたが山の傾斜にさしかかって建て連らねられたF——町は南の山から風が北海に吹き抜けるので熱気の割合に涼しかった。果樹園や畑の見えるだらだら下

りの裾野平の果に、小唄で名高いY——山の山裾が見え、夏霞がうつすり籠めてい
る中に浪がきりりきりり光った。刈り取って乾してある熟麦の匂いがした。

それらが縁側から見える中座敷でお蘭は帷子の仕つけ糸を除いていた。表の町通り
にわあわあいう声がして、それが店の先で纏ると、四郎が入って来た。

四郎はお蘭の前に来ると、お蘭が何とか言ってくれるまでぶすつとして黙って立ってい
るのがいつもの癖であった。それがこの白痴に取ってせいぜい甘えた態度だった。それが
面白いのでお蘭はなるたけ気がつかぬ振りをしてうつ向いている。

だが、やがて振仰いだときにお蘭はびっくりして叫んだ。

「何ですねえ、四郎さんは。そんなおかしな服装をして」

四郎は赤い羽織に大黒さまのような頭巾を冠っていた。

「おら、嫌だと言ったんだけれど、みんなが無理に着せるんだよ」

四郎はお蘭の怒りに怯えながら言った。

「すぐお脱ぎなさい」

お蘭は手伝って四郎からそのおかしなものを取り去ってやった。

「白痴だと思つてこの子を玩弄物にするにも程がある」

すると四郎は、

「白痴だと思つて——この子を——玩弄物にするにも程がある」

とおずおず口移しに真似^{まね}て言つた。不断、お蘭のいうことはすべて賢い言葉だと思つて、口移しに真似て見るのが四郎の癖であつた。日頃^{ひごろ}はそれも愛^{あい}嬌^{きよう}に思えたが、今日はお蘭には悲しかった。お蘭は冷水で絞^{しぼ}つた手拭^{てぬぐい}を持って来てやつたり、有り合せの蕨^{わらび}餅^{もち}に砂糖をかけて出してやつたりした。

四郎は怯えも取れて、いつものようにお蘭の側に坐つてどこかで貰つて来た絵本を拵^{ひろ}げてお蘭の説明を訊くのであつた。お蘭は仕事をしながら説明をしてやる。

「これなんだね」

「鉄道馬車」

「これなんだね」

「お勤め人、洋服を着て鞆持^{かばん}つて」

四郎はその絵姿をつくづく眺めていたが、やがて言つた。

「おら、もうじき洋服を着るだよ」

お蘭は、これがただの四郎の空想だと思つた。

「それはいいわね」

四郎は得意になった。

「おら唄うたつて、踊りおどるだよ」

お蘭は少々訝しく思えて来た。

「どこでよ、どうしてよ」

「そして、伶俐になつて、お蘭さ嫁に貰いに来るだよ」

お蘭はふと、近頃人の噂では四郎の人氣につけ込んで興行師がこの白痴の少年に目をつけ出したということを思い出した。これは只事ではない。

「駄目よ、駄目よ、四郎さん。そんなことしちゃ」

けれども四郎はいつもの通りにはお蘭のいうことを聴き入れなかった。

「よつぽど伶俐にならなけりや、おらに、お蘭さ嫁に來めえ」

そういうと四郎はふいと立つて出て行つてしまった。

洋服を着て派手な舞台に立つことと嫁を貰う資格とを無理に結びつけて誰かがこの白痴の少年の心に深々と染み込ませたものらしい。

四郎がお蘭のところへ来なくなつて、この白痴の少年が金モールの服をつけ曲馬の間に舞台上に現れて、唄をうたい踊りを踊つたのち、真鍮しんちゆうの小判だの肖像しょうざう入いりの黄財布だのを福の縁起えんぎだといつて見物に売るといふ噂を耳にした、お蘭は立つても居てもいられなかつた。片親の父に相談してみても物堅ものがたい老舗の老主人は、そんな赤の他人の白痴などに関かまつても仕方がないと言つて諦めあきらさせられるだけだつた。

冬が来て春が来た。四郎の人氣はだんだん落ちて、この頃では、白粉おしろいや紅を塗ぬつて田舎芝居なかしはいで散々愚弄ぐろうされる敵役かたきやくに使われているという風評になつた。お蘭は身を切られるように思いながらじつとその噂を聞いた。四郎がたとえこの町へ歸つて来てもどうなるものではない。馬鹿を伶俐れい巧くにしてやる事が出来るといふでもないがしかしとにかく、早く歸つて来て欲しいと神仏しんぶつへ祈請きせいもした。

また幾つかの春秋が過ぎた。四郎の噂は聞かれなくなつた。

父親は死んで、お蘭は家を背負わなければならなかつた。生前に父親も親戚しんせきも婿むこをとるようかなりお蘭を責めたものだが、こればかりはお蘭は諾うべなわなかつた。四郎が伝え聞いたらどんなに落胆らくたんするであらう。この心理がお蘭には自分ながらはつきり判らなかつた。お蘭の玉の緒おを、いつあの白痴が曳ひいて行つたか、自分が婿を貰い、世の常の女の定道に

入るとすれば、この世のどこかの隅であの白痴が潰え崩れてしまうような傷ましさを、お蘭の心がしきりに感ずるのをどうしようもなかった。

北海の浪の吼ゆる日、お蘭は、四郎が今は北海道までさすらって興行の雑役に追い使われているということを聞いた。

いつか婚期を失ってしまったお蘭は自分自身を諦め切っている気持に伴って、もはや四郎を生ける人としては期待しなくなつた。

私はこの話を昼も杜鵑の鳴く青葉の山へ行つても、晩の歓迎会の席でも、また宿屋へ帰つても古いことを知つてそんな年寄りを見つけると、訊ねて聞き取つたのである。歓迎会で会つた老婦人の一人は言つた。

「お蘭さんは、まだ生きています。××蘭子と言うのです。何なら尋ねてご覧遊ばせ。F——町はちようど講演にお廻りになる町でもございましょう」

私が尋ねるまでもなく私がF——町へ入ると、停車場へ出迎えた婦人連の中にお蘭を見出した。白髪はくはつの上品な老婦人で耳もかなり遠いらしく腰こしも曲つている。だが、もつと悲

劇的な憂愁を湛えた人柄を想像していたのに、極めて快活で人には剽軽らしいところを見せ、出迎えの連中の中での花形になっていた。

私は河鹿の鳴く溪流に沿った町の入口の片側町を、この老婦人も共に二三人と自動車で乗り上げて行つた。なるほど左手に裾野平が見え、Y山の崖の根ぶちに北海の浪がきらきら光っている。私は同席の人もあるので、どうかと思つたがお蘭老婦人のあまりに快活な様子に安心して訊いてみた。

私がたずねようとした四郎という白痴の少年の名だけを聞き取つた彼女はすぐこう言つた。

「一時は四郎も死んだことにして思い諦めました、なにしろ自分より六つ七つ若いのですからまだ生きているかも知れません。もし四郎が帰つて来たら労わつて迎えてやる積りです。こう心を定めてから、気持はだいぶ楽になりました」

だから一時拵えた四郎の位牌も何もかも捨ててしまつて、折につけ四郎の消息を探ることにしていると、お蘭老女は語つた。

私は、不思議な人情を潜つた老女の顔に影のように浮く薄白いような希望のいろを、しみじみと眺めた。そして一人の女性にこうまで深く染み通らせた白痴少年の一本気をも

想^{おも}つてみた。その夜、客となつた長者の家の奥座敷で食事後休んでいると、お蘭老女が尋ねて来た。そして話の途絶えた間、北海の浪の音を聞いていると、私はこの老婦人と一緒に永遠に四郎を待つ氣持になれた。烏賊^{いか}つり船の灯が見え始めた。

（昭和十二年十月）

青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 岡本かの子」筑摩書房

1992（平成4）年2月20日第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集 第四卷」冬樹社

1974（昭和49）年3月18日

初出：「雄弁」

1938（昭和13）年9月

入力：やいふ

校正：しず

1999年3月20日公開

2016年2月3日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

みちのく

岡本かの子

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>